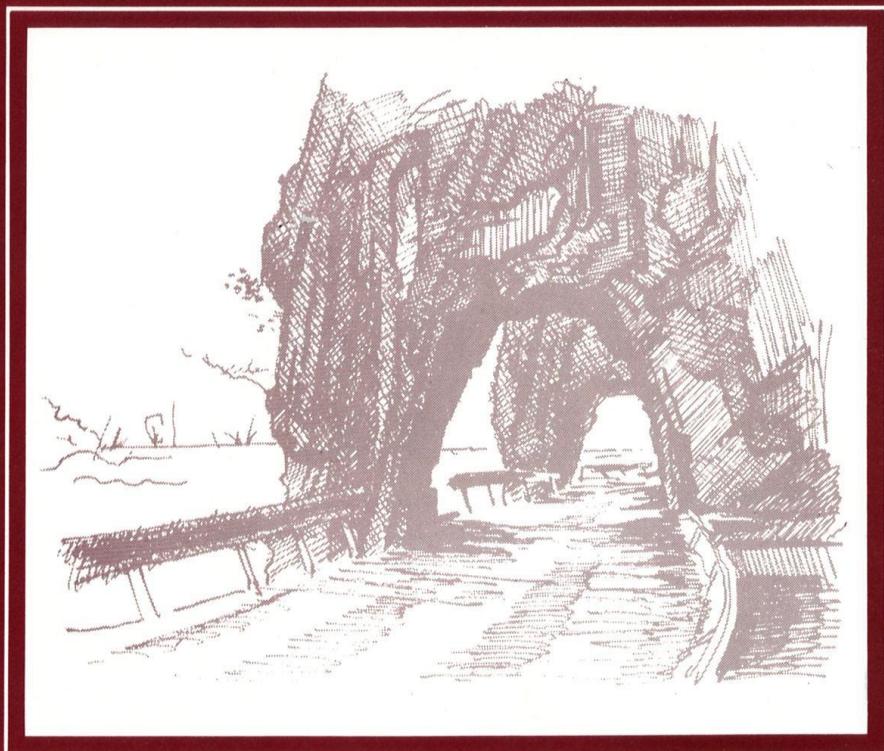


やまざき文化

'84-2*No.3



山崎町文化連盟編集発行

機関誌「やまさき文化」第三号発刊に際して

山崎町文化連盟会長　壺阪　壽



「やまさき文化」もいよいよ第三号を発刊する運びになりました。その間、編集に携つて下された方々には、本当にご苦労を、おかげしました。そういった方々の努力が実をむんで次第次第に内容も充実し、名実共に山崎の文化を結集したるものに成長してまいりました。

さて、本年も町内では色々な文化活動が繰り広げられました。文化連盟傘下の18の団体が、それぞれの分野で高い水準の活動をされたことは、山崎のもつてゐる地域文化の向上に大いに益するところがあつたと考えられます。

又、文化連盟の主催致します講演会に

は、特に郷土ご出身の方々にお願いしようとすることで、本年は京都大学で地質学を専攻しておられる清水大吉郎先生をお招きし、山崎断層を中心に色々興味深い講演をしていただき、一同大いに感銘を深くしました。更にこれからも、色々な方面でご活躍の町ご出身の方々に講演をお願いし、郷土とのつながりを深めたいものと思います。

どうかこの小冊子が、三号・四号と続いてまいりまして、地域文化の向上と地域文化活動の活発化のために、少しでもお役に立つことを心から念願するものであります。

やまさき文化第三号発刊に際して
★ 目 次 ★

2

帰国　壺阪　壽　2
ボール・デルヴォー譲　浅田耕三　3
事務局雑報　安井道夫　5
阿蘇の史盗人に遭う話　長川　生　7
中近東諸国の紛争に想う　根岸元彦　12
『各部寄稿』

藤村省三　15
美術とは　小川　登　16
山崎町民合唱団プロフィール　藤井七代　17
短歌　藤井七代　17

第三回山崎町俳句大会催される
磐座　前田　連　20
ふんだりけ　和田疎人　18
山崎八幡神社奉納薪能　池田恵瑞　19
宍粟の碁出版記念大会　高野圭介　21
一管に託す　石野和雄　22
岩田神社の獅子舞　中村正澄　19
私とさつきのふれあい　中井昭男　23
西行や芭蕉の文学に我が老いを習う　神山宗明　25

新潮会一年のあしあと　伊藤親保　23
謡曲十五徳について　杉元清美　24
茶道研究会　横尾　昇　25
文化連盟役員名　神山宗明　25
編集後記　伊藤親保　23
表紙　26
題字／与位の洞門　26
文化連盟役員名　26
編集後記　26

帰国

山崎文学会

浅田耕三

肥前平戸藩松浦氏の家臣で勘定吟味役

を勤める尾坂周三は、天明五年一〇月一
三日婚姻の式を挙げた。

花嫁は同藩組の小十人頭新原伊織の娘でないといい、小柄ながら細面の、目の凜とした美人であった。

式、といつてもせいぜい六、七人の親戚が集まつた程度で、形ばかりのお披露目も午後九時には早々と終つた。

客が帰ると新婦は手早く普段着に着替つた。しばらくすると、周三が台所を覗き、ぬいに居間へくるようにいった。

「これは明後日の出立の用意だ。母上があ
一通り整えて下さっているが、そなたも
目を通じておいてくれ」
片隅にきちんと衣類が揃えてある。

「かしこまりました」

頷いたぬいの横顔にふと不審の眼差を
おくり、「どうかしたのか」「えつ」「少し顔が青いようだが」

「いいえ、そんな事ございません
「そうか。それならよいが……」

二日後の一〇月十五日の朝、参勤交替

で江戸に上る主君松浦静山の供をして尾坂周三は平戸を立つた。

海上六日、陸上三四日の日数を費して

松浦主従は一月一七日江戸につき、静

山は浅草鳥越にある上屋敷に入った。

それから半月程たつて、尾坂周三は、本藩の江戸留守居役國重主殿に呼ばれ、本所の藩下屋敷で主殿に会つた。

「其方を留守居役支配恵見左兵衛の相役
に推举したいがどうじゃ」

「えつ私が留守居役殿御支配？」

耳を疑つた。思いもかけぬ主殿の言葉

であつた。

江戸留守居役は参勤交替で主君が国元

滞在中、江戸屋敷を預る。幕閣への陳情や折衝、他大名家とのつき合い、物産の交易など、江戸における藩外交の一切はこの留守居役があたる。その他にも藩邸の維持管理や奥向きの世話、財政の運営などもある。つまり百日参勤であつた。参勤がおわると江戸から平戸返道中に一ヵ月半かかるが、大体四月一〇日頃には帰国で三年ぐらは江戸定府となろう。

忙で、そのため二人の支配を置いて、その裁量に委ねて仕事を分担させていた。したがって留守居役支配は第一に弁舌さわやかで、頭脳明晰でなければならぬ。が、自分はその正反対の男だ、と周三は思った。での旨を述べて辞退を願つた。

「実はこれは御後見松浦雅信殿からのお申越しでな。何といつても外交は信用第

一、それには篤実温厚な其方が最適任と松浦殿のたつての御推薦ゆえ、ここはどうしても其方に引受けてもらわねばならぬのだ。ただし――」

と、そこで主殿はちょっと切つて、

「来年二月には御主君と共に是非帰国させてほしい。新妻が待ち焦れているゆえ」との添え書きがあつての」

にやりと笑つた。

雅信は藩守後見役として家中筆頭人である。その推薦とあれば断るわけにはいかない。

百日の江戸勤番の予定で周三は国を出てきている。平戸藩は長崎警備の任を幕府から命ぜられているので、参勤は一一月末迄に江戸に上り、翌年二月に御暇になる。つまり百日参勤であつた。参勤がおわると江戸から平戸返道中に一ヵ月半

初めてそれと悟つた。

結婚は江戸詰をすませてからの予定だ

ったのが、周三の病身の母のたつての希望で半年くりあげ、そしてすぐに、又こうして離れ離れになつた。

國元へ飛脚が立つのは月に一度である。その度に周三は近況を書き送り、國元の細々と記され、それから親類の誰彼の消息にふれたあと、末尾に必ず、来春のお

けれど、まあ雅信のたつての推舉とあ

らばやるしかない。とにかく来年二月に

は主君について一度国へ帰れるのだ。

新妻に周三はせつせと便りを書いた。

父親同志が昵懇で子供の頃からの許婚けであった。両家に何かある度に二人は顔を合わせて大きくなつた。小さい頃はい

いなすけときかされてもこれという感慨もなかつたが、年頃になるとさすがに特

別の気持ちが動いた。が、まわりが二人の仲を知つてゐるだけに、かえつてなれなれしいそぶりもできず、二人つきりにならぬのもとなくためられた。ただ、

さりげのないしぐさや相手の眼にお互いの好意をたしかめてきた。だからあの式の日の晩、居間に入ってきたぬいが、少し顔蒼ざめていたのも、一つ部屋にいよいよ一人つきりになることの緊張からだつたのだろう。江戸へ来てから周三は、

いつのまにか、一つ部屋にいよいよ一人につきりになることの緊張からだつたのだろう。江戸へ来てから周三は、

目もじ楽しみに待居り候、と記してあつた。

三ヵ月が経ち、天明六年も二月となつた。主君静山の国元への出立は二十五日と決まつた。

その直前の二〇日の夕刻、相役の恵見左兵衛が急死した。卒中であつた。

「氣の毒ながらこうなつては其方、江戸を離れるわけにはいくまい。どうじや、夏までにはお手伝普譜の目途もたとう。そしたら遅くとも秋には帰国できる。それまでは、のう」と主殿はいつた。

この年の一月十九日、藩守松浦静山は月番老中の田沼意次から関東川々の普譜の手伝を岡山の池田治政・徳島蜂須賀治明・宇和島伊達村候などと共に下命されていた。その経費負担額はこれから幕府との折衝で決まる。折衝の経過も国元勘定奉行へ逐一通知しておかねばならない。

主殿に言われる迄もなく恵見がなくな

川普譜手伝における幕府との折衝以後で

れば、自分が江戸を離れられることは周

三自身、一番よくわかつている。

諸式の高値で江戸屋敷の経費がかさむ。その上に川普譜で在所年貢をすでに一步加徵した国元の苦勞を思い、僕約第一を

奥向きは無論中間小者に至る迄徹底させねばならない。それやこれやで周三の手紙はいつか二カ月に一度となり、さらに

三月に一度になった。が、ぬいの方からは飛脚の度にきちんと届く。読む度、周三はすまぬと思ひながらやはり山積する仕事に追われた。秋には、と主殿はいい、

その秋はとっくにきたが、やはり周三は帰れそうになかった。

天明六年八月、川普譜手伝の納付金が決まつた。九七九六九二分、ただし惣入用銀は七九七貫六九二匁で、六〇匁を一両とすれば一二三九五両である。

周三は直ちに国元へ飛脚を立てた。

同年一一月、出府してきた静山は、長年の心願である江戸参勤一年を幕府要路へ働き、それにともなう長崎警備についても老中へ意見を上申した。あわせて江戸邸の風俗について改正にのりだし、召使い人足の奢侈をいましめ、質屋へ通うのを禁じて、作事方で歩のよい質錢を渡して質物を預るなどの工夫を試みた。そ

周三が静山の深い信頼を得たのはこの

ある。

静山は自分の心願筋をすべて周三にうち明けてその意見をきいた。柳之間詰で

あつた静山は、何とかして松浦家を以前のように譜代並雁之間詰家格に戻し、なにかに慣れたこの権門の男共に意外な程の野心をもつていた。その為には老中への工作が要る。誠実朴訥な周三は、阿諛に慣れたこの権門の男共に意外な程の野心をもつていた。その為には老

中への工作が要る。誠実朴訥な周三は、

阿諛に慣れたこの権門の男共に意外な程の野心をもつていた。その為には老中への工作が要る。誠実朴訥な周三は、

阿諛に慣れたこの権門の男共に意外な程

の野心をもつていた。その為には老

中への工作が要る。誠実朴訥な周三は、

奉行には遂になれば雁之間詰もいつになつても実現しそうになかった

藩財政は依然として窮迫していたが、この「甲子夜話」の作者、静山の派手な外交策はかわらず、寛政六年には再び川

普譜を命ぜられた。相変わらず多忙な周

三が、父の死をぬいから知らされたのは

享和二年九月の事である。

長年、舅姑に仕えてくれた郷里のぬい

に、周三は何ヵ月振りかに長いお礼の便

りを書いた。

寛政二年一月、平戸藩は一年間の参

府となつた。幕府はオランダ船の帰帆以

後まで在国に及ばずと決め、静山に四月

参府を命じた。ただし長崎警備について

は一層油断なく勤めるようとの事であつた。

国元を出てから、実際に二年たつてい

た。

彼を推挙した松浦雅信はとっくに故人となつていた。後を継いだ城代の役宅へ

寄つて帰國の挨拶をしてから、周三はわが家へ足を向けた。

門の前に小柄な女がひつそりと立つて

こつちを見ている。

周三は大きくなづき、自分も深々と

一礼した。

「ただ今戻つた」

五十に近い頭に白いものが目立つ。

「長い御道中、さぞお疲れございまし

にこやかにほほえむぬいの顔は、少し

肉がついて昔と比べると丸くなっていたが、想像していたよりはずっと若々しい。帰國後の二人の睦じさは奉公人達も羨むばかりであった。夕方など前栽の枷羅木の横にしつらえた床几に並んで坐つてたのしそうに話し合っている二人の姿が毎日のように召使い達の目に映つたといふ。

帰国して二ヵ月後、夫妻はぬいの妹の末娘で妙という四つの子を養女に迎えた。ある時、親戚の婚礼があつて夫妻は招かれた。式のあと披露宴があり、酒も少し回った頃、客の一人が正座の花婿に、今後の心得を諭し始めた。ひどく弁巧の男で、妻を娶り子を生しても武士たるもの、うかと妻子への愛情に溺れて大事の覚悟を誤つてはならぬ。その為には平生の心得はしかじかと……ひどく整然と説ききかす。

もともとこの地方の婚礼には、そんなならわしがあって縁者のうち見識ある者が選ばれて花婿の説教に当る。始まるところ花婿は無論、婚礼客も礼儀として私語をひかえて拝聴する。

「わが子というものは可愛い。ことに三、四歳ともなれば無性に可愛くなるものだ。だが武士たるものは不用意に抱いたりしてはならぬ。抱けば知らぬうちに情が移り、一旦緩急の折後髪ひかれて進退を誤るからだ。さいわいここには御奉公の為



一身の事は豪末も顧みられなんだ尾坂殿がおられる。尾坂殿はわれら家中の手本であり、縁につながる者にとってこの上ない誇りだ」

静かにそうしめくくつた。
と、それまで黙つてきいていた周三が突然大声で叫んだ。

「ぬい、ぬいはおらぬかツ」

別間で女同志、談笑していたぬいが何事かと中戸を開ける。

「妙はどうした、妙をこっちへ寄越せ」
「よしよし、妙か。うんうん、可愛いの
う、ここへ入れ」

相好をくずして周三は妙を抱きかかえて膝へのせ、いきなり頬ずりし唇を頬にあてた。

「何ぞ食いたいか。うん？ この芋の甘
膳などどうじや。おいしいぞ」

膳の上の料理をつまんで口へ入れてやり、又頬ずりする。

啞然とした人々の目が、たちまちその丸くかがめた背や顔にあたつた。が、そんなんまわりの様子など一向に気にする風はなかつた。

ルネ・マグリットが執着した画題に、「凌辱」という、みるからに不快をさそう奇怪な女の顔がある。

ポール・デルヴォー讃

山崎文学会 安井道夫

二人の先達からは、既視感ただよう街角風景やみなれた物体が石化していく過程に、ふと現われた現実の裂け目、そんな魔術的な物体凝視を学んでいったと思われるが、それでもデルヴォーが画家を志してから余りにながい停滞は何に由来するのだろうか。

デルヴォーは、殆ど美しい女体ばかりを描いた画家である。今回の展覧会場をゆっくり歩きながらも、その女たちから発散する不思議な輝きに魅せられる。

観客たちが目の前を通り過ぎていく。その向こうの壁に、例えは「サバト」(魔女たちの夜宴)が懸つてある。森といつても線路に近く、灯のついたままの空の電車がかなたに止っている木の間。その

である。それが甲のあたりから物化して、だらりと紐をたらし、本当の足を待つて口を開いたブーツに変身してしまふ。

生身の青白さをたたえた指先とともにしての黒い靴との境界のぼやけた色調が非常な不安をよびおこす。

ポール・デルヴォーはこの同国人マグリットと、「街角の憂愁と神秘」の画家ジヨルジュ・デ・キリコの、二人の先達によつて遅ればせながら、絵画の自由に開眼し自己の技法を確立したのは、ようやく一九三六年、デルヴォー三九才のときのことである。

二人の先達からは、既視感ただよう街角風景やみなれた物体が石化していく過程に、ふと現われた現実の裂け目、そんな魔術的な物体凝視を学んでいたと思われるが、それでもデルヴォーが画家を志してから余りにながい停滞は何に由来するのだろうか。

デルヴォーは、殆ど美しい女体ばかりを描いた画家である。今回の展覧会場を

闇の空間に点々とローソクの灯がともり、魔女たちは宴の最中である。一番前にカ

ンテラを置いた机が一つ。その机に向つて坐った半裸の女を中心に、左にブルーの布をつけた女、一方には右手に紫の衣を垂らした女と黄色の腰布をつけた半裸の女が、お互い肩を組み合うようにして立ち、その二人の空いた手が上下に対応するよう差し出されている。

その手の先にあたる中景には、裸身を誇示するかのように布を乳房の上にまで引きあげ、あげた手を頭の後ろで組んで大の字に足を抜けた女。ちょっと向こうにはレズビアンともみえる女たちが、坐つたまま組み合つている光景がある。

さきの二人の女の背後、画面の一番右側には、ヴィーナスの水浴図を思わせる娘がひとり、これまた黒々とした恥毛をもつた下半身を誇示するかのようであながら、その顔をみれば無表情に、うつむき加減に目を閉じている。

この絵の中でもっとも奇妙に思われるのは、左端の男の姿である。魔女たちの狂宴にしてはあまりにも静かな、この美しい光景には一切目もくれず、大きな鏡に己の全身を写し出しているのである。

その鏡の中の風景だけが、次元の異つた現実といわれるものの一端であるかもしない。

これは、たまたま『サバト』という画

面であったが、「海は近い」でも、「月の位

相II」であつてもよい。女たちの、眼窩よりももっと大きいかと思われる見開かれた眼は、虚ろに開かれるばかりで、決して対象を捉えることがない。

開かれていても閉じられていても、群像の中にいてもひとりであつても、相手として対象を必要としない世界に生きている女たちである。月の光に照らされて、かけは斜め前方に落ちようとも、女体自体が発光体かとも見紛う怪しい光に照らされて常にひかり輝いているのである。

観客が、かけの中を歩いていく。かけになつていくのは通り過ぎて行く現実の人間であつて、その向こうの画面の女たちだけが、暗い展覧会場の中で生きているように見える。

一九七五年六月、京都の展覧会で、「こだま」という象徴的な作品をみた。キリコばかりの建物と憂愁のかげをもつ月光の中で、三人の全裸の女が歩いてくる。体をやや前屈みに、左手は折つて前方に、右手はやさしく後ろに振つて、歩いている一瞬そのままの動作で静止してしまつたのだろうか。

遠景、近景とその真ん中にもう一人の三人が、画面の中心に向う舗道の敷石にそつて一直線に並んでいるのだが、それはひとりの女の全くのコピーダーである。

デルヴォーの女は、すべて「ある女」

のエコーではなかろうか。「エロティック

な芸術家の幼年時代には、ほとんど必ず極端なエディップス・コンプレックスが見られる」(瀧澤龍彦)というが、次のように年譜を見るだけで精神分析家ならずとも、デルヴォーがいかに幼児期に釘づけにされた人間の典型であったかが納得できる。

「一九三二年一二月三一日の夜から一月一日にかけて、母のロール・シャモットが死去し、初めてデルヴォーは母親の三年はデルヴォー三十六才である。

「最終列車」という作品がある。画面一杯に広がるシンメトリーな列車の内部むかって左側の座席に、白い肌の女が腰掛け、中心手前に足を投げ出している。その若い女がひとりいるだけ。窓の外は薄暮。ほんの少し頭を倒しただけで、相変わらずの大きな目で、虚空をみている全裸の姿を見詰めていると、なぜか私は死者の国を連想する。

さきの展覧会での出品油彩画三七点のうち、十点までのどこかに、骸骨または髑髏が描き込まれているというのは尋常なことではなさそうである。

もう一度、年譜をみてみよう。一九〇四年(七才)デルヴォーは小学校に入学し、教材ケースの中にある「動物標本や、人間の骸骨や猿の骸骨に取りつかれる」幸福な幼年時代、いや、余りにも幸せをもつてゐるのに気付くのである。

かつて、オルフェウスは堅琴をたゞさえて、最愛の妻エウリュディケーを求め黄泉の国に下り立つたという。母の死後デルヴォーが突然に、解放されたその場所は、皮肉なことに若い母の住む常世

であつたといえないだろうか。

死とは、時間の中から現在を取り去つたものである。過去と未来は死者の国で連続しているように見える。

デルヴォーがデルヴォーらしい成長を遂げた後の画面に、繰返し現われるもの財産目録を作つてみると、その幼児期の感情風景が再現できるはずである。

それはギリシャ・ローマの古代建築、線路と停つてゐる電車や汽車、トンネル、ジュール・ヴエルヌ『地底旅行』のさし絵から抜け出して來た鉱物学者リーデン博士が死去し、初めてデルヴォーは母親の年譜を見るだけで精神分析家ならずとも、デルヴォーがいかに幼児期に釘づけにされた人間の典型であったかが納得できる。

さきの展覧会での出品油彩画三七点のうち、十点までのどこかに、骸骨または髑髏が描き込まれているというのは尋常なことではなさそうである。

の見本市でスピッツナー博物館の展示を見て強い衝撃を受ける。骸骨や裸の女性のデッサンを数多く描く」とある。この

ように、画家としての新たな出発の時期に、骸骨と裸の女が等価であったということは注目に値する。

今年の始め、神戸の県立近代美術館で、「ベルギー象徴派展」という非常に有難い展示があった。最初に会場に入つて、目にとび込んでくるのは、アントワーヌ・ヴィールツの「麗しのロジース」（一八四七年）である。ほとんど裸に近い、文字通り豊満な娘が吊り下げられた骸骨と相対している。娘は別に恐れる様子もない。その骸骨を取り去つてしまえば、何か結婚式でも思い描いてみたくなるよう



俳句とハイキング

な期待さえ秘めているような態度なのである。

それから丁度百年の後、デルヴォーは同じような構図のある『スピッツナー陳列館』を描いた。この両者には、もつとも生きしい少女と死者そのものとの宥和した共存の姿がある。

「象徴派」展で歩を進めるにつれて私は、印象派のあの華やかな外光のやや上ずった色彩とは反対に、沈んだ神秘的な色調に次第に引きこまれていく。

ベルギー象徴派の中からクノップをあげるとすれば、その「ブランドルの思い出—運河」や「みすてられた町」は、ローデンバッハの小説『死都ブリュージュ』に直結し、その系統を追えば、少女を歌

うように死をも歌つた『オルフェウスのソネット』の詩人ライナー・マリア・リルケを見出すことになるだろう。

そして、ものの神秘性をみつめて星のただ中に夜を描いた多くの画家達の最後に、「夜の美女たち」のデルヴォーが飾ら

れているのである。

デルヴォーには、ハンス・ベルメールの手の切れるような鋭利なエロティシズムはないし、マックス・エルンストの知的な反抗精神とも無縁である。

デルヴォーをシュルリアリストとして見るよりも、母の思い出とベルギーのめぐまれた伝統に深く根ざした画家としてみて、より一層あの女たちが生きてくるようと思われる。

事務局雑報

長川 生

文化会館建設促進委員会の動き

昨年八月結成いたしました促進委員会

（委員長・藤井慧乗氏）は、山崎町が昭和

六十一年度に計画している、山崎町文化

会館建設（或は郡立文化会館かも）に即

応するため、各地の文化施設を見学し、

調査研究をすすめております。

近々これらの資料を委員会でまとめて、文化連盟の要望として、21世紀の山崎町にふさわしい文化会館の建設を、町当局に提言するでつかい夢をもつております。

〔俳句とハイキングの集〕

連絡先：山崎町教育委員会社会教育課
十一月二十日、親子の俳句とハイキン

〔注〕

一九八三年春開館した姫路市美術館には、常設としてポール・デルヴォーの壁画「女神」外二点、版画数点が展示されている。



『むかしの山崎写真集の作成に協力を!』
むかしの「山崎写真集」作成の、ネガ
収集につきましては、町広報（58年10月
号）に掲載していただきましたところ、
多くの提供がありよろこんでおります。

うしなわれていく町並や、昔の風俗・
行事等を収録し、一冊の写真集として、
後世に残したいと存じますので、各家庭
でお持の貴重なアルバムから、めずらし
い写真を、ぜひお貸しください。

外九句（紙面の都合上割愛）を、山崎俳句

協会長和田疎人先生から披講されました。
また参加者全員が、本条邦子先生に書いて
もらった記念の短ざくをプレゼントされ、
大喜びで楽しい一日をすごしました。尚当
日は、山崎俳句協会・山崎高校野外活動部
の皆さまのご協力ありがとうございました。

阿蘇の史盜人に遭う話

山崎文学会

荒木俊介

記録もあるし、彼等の借金証文も數多く残されている。

数多く

阿蘇の史盜人に遭う話

年号とか、年月と言つたことは分らな
(一)

年号とか、年月と言つたことは分らぬ
いし又、この話に関係ない。平安の頃の
話だと思っていただければよい。

大内裏内の役所の出退時刻は季節によつて違うが、大体、夏で出勤が午前六時、退庁が午前十時、冬になると、出勤が午前七時半、退庁が午前十一時で、その時刻に太鼓で大内裏中に知らされる。現代では一寸考えられない、のんびりとした優雅さである。

それ彼等に与えるのである。だから、彼等が離し立てるのも、からかい半分、貰いたさ半分なのである。

その彼の顔の中で一つ取柄がある。それは小さいが、くりくりと敏捷に動く目である。性格も、その目が語るように機転もきけば、思慮深さも持ち合せている

りとかわされるし、仕事の上では絶えず先を越せるために、尚さらじれつたく思うのである。

或る日、史きかんの机に若い書生が

一頭かお呼びです

すると、又かと言つた同僚の目が、ひそかに彼の方に集まる。だが彼も心得たもので、

「う、
うん」

と返事をすると、とぼけた様な表情で立
ちあがると、身を屈め屈め頭の席に向つ

出仕の時の装束も色褪せて古びている。擦り切れそうになつてはいるが、上手に繕うわれている袖口、形のくずれかけた

烏帽子、底の擦り減つた沓、だが、本人は一向に気にしていない。

史ともなれば、体面上、牛車は持つて

なものである。役所に通う牛車の中で史の牛車を捜そうと思えば、その中で、最も見すばらしいものを選べばよい。

の見えた黒牛である。
手綱をもつた牛飼童は、腹を立てて彼等を追い払おうとするのだが、史は「よいよい、ほうつておけ。」
と言いながら、たまたま菓子このみなどの持ちあわせがあると、簾を上げて招き寄せ、

当時の役人の給料と言えば、大政大臣以下、参議と言われるトップクラスで、現在の金で約年収一億円位と言われ、史より下の下級官吏になると、生活のため、寺の写経のアルバイトもすると言つた

用件は分っている。季節柄、夥しく納入されて来る物資、或は、そのまま現地の国衛の倉庫に保管される物資の帳簿上

の整理である。

頭の席の前に行くと、彼は机の上の山と積まれた書類を指しながら言う
「すまんが又、これを今日中に頼む。」
残業である。やがて、退庁の大太鼓が鳴ると、一齊に役人の退庁が始まる。

(三)

六條洞院と言えば、東の市の近くで遊妓宿が多い。その中で一流と思われる、宿と言うより邸がある。以前は、さる貴族の持物であつたらしい。その邸の中の放出と思われる離れ座敷に、四、五人の派手な装束の役人が、先程からひそひそと話をしている。

話がまとまった所で、首謀と思われる紅い装束をまとった鼻の高い細面の役人が、「よーし、それじゃ話は決った。どうにも、あの団子鼻のとぼけ面が気に喰わぬ。これから、それぞれ用意にかかるて、今度こそいやと言う目に会わしてやろうじゃないか。」

と言うと、卯の刻に再びここに集まることを約して、彼等は出て行つた。

どうやら、主計寮のよからぬ役人達が集まって、阿蘇の史への謀り事を相談していた様である。

卯の刻と言えば十一月末になると、辺りは、とつぶりと暮れてしまう。彼等は今度は部下の中から三人の雑色を選ん

で連れて来ると、裏門から、こつそりと入つた。再び遊妓を遠ざけて、放出に集まる、その三人の雑色達に、ひそひそとそのたらみを命ずる様に説明した。
一番目が、肥つて赤ら顔の大男、二番目が、しゃつくり顔の細い男、三番目が

目が、しゃつくり顔の細い男である。

「承知しやした。その阿蘇の史とやらの帰りの車を襲つて、奴を丸裸にすりやいんですね。」

肥つて赤ら顔の大男が言つた。

「そうだ。その阿蘇の史つて奴は上役にごまをするわ、帳簿はごまかすわの飛んでもない悪党だからな、遠慮することはない」

首謀の紅い派手な装束の役人が煽つた。

「役人の悪党と聞きや、あっしらは、むしろ走る程嫌いなんであ、それじゃ奴を身ぐるみ剥がして、裸のしやもの様にしてやる」

と真中のしゃつくり顔の男が言つた。

「ただし、手荒な事だけはするなよ。」

三人が、口を揃えて答えた。

「へえ、わかりやした。」「さあ、この黒装束を持って行け」と、彼等を裏門から送り出した。

「おーい、刀自」と邸の女主人(おもじ)を呼んで座敷を変え、後は遊妓を交えての金にあかした豪勢な酒宴となつた。

(四)

裏門を出た三人の雑色は、目指す牛車の見やすい場所として大内裏の南側の美福門の辺りを選んだ。隠れるのにも恰好の場所だつた。

十一月の末の都の夜は冷え冷えとして寒さが身にしみた。

中空には、折りからの半月が皓々と冴え渡り、都の屋根屋根をしらじらと照している。聞こえて来るものと言えば、空を響いて来る長く尾を引いた野良犬の遠吠え位のものである。

夜の明りの発達していない当時の都の賊が侵入したり、「古今著聞集」には、さる高貴な貴族の邸の中の女房の一人が

夜の治安は大変物騒だつた。宮中にまで盗賊の一味の首領であつたと言う記録がある程である。

黒装束に身を包んだ三人の俄か盗賊は刺す様な寒さに耐えながら、今か今かと史の牛車を待つた。

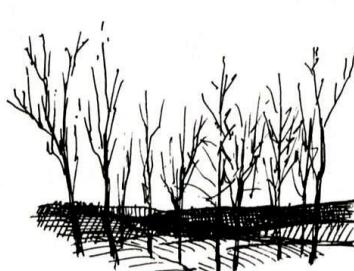
一刻程経つた頃、

「しーつ、車の音が聞こえて来る。」

彼等は一齊に物陰から乗り出して東の方を見た。

大内裏の南側の築地塀に沿つて、月にいよいよ牛車が美福門の前にさしかかっている。

点があることを確めればよいと指示されている。牛の眉間に白い斑点がはつきつた。三人は互に目で合図をすると、見えた。三人は互に目で合図をすると、「その牛車、待てッ」と刀を抜いて、バラバラと襲いかかつた。



かーと、驚いた表情の牛飼童と二人の雑色の前に、ゆっくりと降りて来ると、「間抜けな盗人め、こんなこともあろうかと、装束などは脱いで丸裸になり、総て畳の下に敷いて置き、既に東の大宮辺りで公達殿に、これこの通り丸裸にされましたと言つてやると、頓馬な盗人め、まさかと思う程まんまと騙されおったわ。ハハハ！」と大笑いした。

傍で、しばらくは信じられないと言つた表情で、史の顔を見ていた牛飼童と雑色達は、「これはしたり」と、手を打つて大笑いすると同時に、史の思慮の深さに感心した。

走り出で来た妻も漸く事情がわかつたらしく、「あなたと言う方は、盗人にも優る恐しい心を持たれたお方です。」と、夫の無事を喜んだ。

大笑いをした後は、やれやれと言う気持からか、急に空腹を覚えた。彼は妻に向つて、「おい、食事だ」と答えると、妻が「まあ、盗人に偽物だの、本物だのって聞いたこともないですよ。」

と言つてから、三人の者達にも、「そなた達も、ご苦労であった。夜食をとつてから、ゆっくり休め。」と労つて、邸の中に入つて行つた。妻が後からついて來た。部屋に入ると、今し

がたまで、妻は縫い物をしながら待つていたらしく、そのままの形で縫い物が敷物の上に置かれていた。

彼はその敷物の上に立つた。妻が後から、いつもの様に装束を解きにかかつた。縫い物に掩われていたためか、まだ敷物に残っていた妻の温みが足の裏から全身にじーんと伝わつて來た。

(隨 想)

中近東諸国の紛争に想う

山崎文学会 根 岸 元 彦

の宗教戦争である。同じ回教徒内で、あれはシーア派だ、これは何派だというの個人的には何の怨みも無い者が憎み合い殺し合う。全く日本人には想像でき

もし我々日本人たつたら 同じ仏教徒
同士があいは真宗だ、俺は法華だとい
つて敵意を持つだろうか、むしろ相手の
宗旨などどうでもいいというのが、一般
的な日本人の意識であろうと思う。まあ
そういった所が欧米人から見れば、日本
人は宗教性が薄いとか、無宗教民族だと
か言われる所以かも知れない。

確かに外人から見れば日本人は子供が生まれると氏神様へ初宮詣でをし、盆には元祖一郎満之二郎、お祭りにはお

こしをかつぎ、神前結婚をし、神様が居られるのかどうかも分らないようなホテルや、キリスト教徒でもないのに、カッコいいからといって教会で結婚式を挙げたり、

死んだらお寺で葬式をするなど、まるで
滅茶苦茶だと言うのかも知れない。

しかし私は、そこに日本人のおおらかな民族性を見たいのである。争い事を好まず、抱擁力があつてすべてを内に同化

し、平穏な社会を希求する平和愛好の民と私は見たい。同じ宗教を信仰しながら宗派が違うというので厳しく対立し、血で血を洗う争いを続いているアラブ諸国を見てると、そこまで厳格というか、頑迷

とも言えるような宗教性には私はついて行けない。恐らく日本人なら殆ど皆、そ

だが私のように、中東紛争を単純に宗

して死んでゆくらしい。

教戦争ときめつける事には、きっと異論があるであろう。いろんな評論家達の言ふ通り、彼等には宗教以外にも、宗教国家としての回教国の成立条件や、民族性、習俗性、国家間の政治性とか、長い歴史の中間に作り上げられた沢山の要素が交錯していることは、世界歴史に多少の興味を持つてゐる私にも十分理解できる。しかし尚かつそれらの中で最も重要な因子つまり近因的なものを求めるとすれば、宗教色以外何者もないと私は考える。現

日本人の宗教意識も近代思想につれて變つてしまつたからではないか。

右の欄欄に、まるでキリスト教の十字軍時代と少しも変わらないと思うのである。その昔、中世の十字軍時代のキリスト教徒とは、キリスト教以外の異民族はすべて野蛮人の邪教徒であり、人間の資格を備えていない畜生に等しい者達だから、これらを殺すのは犬や猫を殺すのと同じで何の悪業でもなく、むしろ神の意志に沿った善行であり、つまり聖戦であるとの宗教的信念に燃えていたのである。し

それでは、あんな宗教意識を今に持ち
続いている回教圏は、世界の中で文化的
に遅れを取つて、取り残されているのか
という疑問が残る。確かに彼等回教圏は
物質文化では世界的に見て、遅れている
ことは間違いない。しかし皮肉なことに、
精神文明が物質文明と共に進化することは
決して言えないものである。むしろ物質文
化の進んだ国ほど、精神文化は退廃して
いるのが現状である。

しかし今では、そんなことを考えるキリスト教徒はないであろうと思われるが、現在の回教国では、異教徒（同じ回教徒でも宗派の異なる者）を殺すことは、神の意志に従う事であり、この戦いに生命を

例えば、ニューヨークの街を一人で歩くことは、アフリカの猛獣地帯を一人で歩くより、はるかに危険であるといわれる。道徳心も罪の意識もあつたものでない。ニューヨークの地下鉄のあの有名な

落書きはどうだろう。車の中も駅の壁も落書きで埋まつて、もうどんな余地も残っていない。そして最も危険な場所がこの地下鉄と、ハレムといわれる黒人街である。わが国の地下鉄と比べて、全く呆れ果てた公徳心である。又、一昔以前、勤勉と実直さで世界的に有名だった西ドイツ国民の現状はどうか、日本人を働き虫だとかエコノミックアニマルなどと酷評する欧米人は、勤勉を悪徳と見做すような価値転換を行つてゐるのである。同じような精神文化の低下は、我々日本人の周囲にも数々見られる処であり、奈良時代の天平白鳳文化の美術など、今の日本では到底再現は及びもつかない。

話が横道にそれたが、回教国の現状は彼等が末だに宗教の純粹さを保ち、殉教的熱情燃え、精神的には崇高な姿を保つてゐると言えるかどうか。それとも彼ら等の宗教文化は、十字軍や一向一揆時代から少しも進んでいない、時代遅れといえるのかどうか。これらを考えようすれば、も早やそれは純粹な文明批評や、宗教論の領域に立ち入らねばならないので、限られた紙面で論ずることは不可能だが、結論的に私の考えを言えば、宗教といえども人間の精神文化的な現象である。人間の精神文化なり社会現象が変化してゆけば、おのずから宗教文化も変化してゆくのが当然であろう。回教とて、始祖

の予言者マホメッドが説いた教理が、そのまま伝わっているはずがない。それは根本教義であるアラー神への絶対信仰とか、教典たるコーランへの戒律とかは変わらないにしても、その解釈をめぐって、シーア派とかサンニ派とかに分かれているというのは、これは明らかに変化である。それなのに近代文明の思想である人命尊重のヒューマニズムや、自由平等など民主主義の思潮になじんでいないといふのは、矢張り世界的に見て時代遅れと言われても仕方のないことであろう。

およそ宗教には、古代からの日本の神道やギリシャ神話のように、多数の神々を信仰する多神教や、近代の宗教である仏教やキリスト教や回教のような一神教とがあるが、教祖を同じくする仏教やキリスト教にしても、その宗派は多数に分派していることは誰もが知つてゐる。近代の宗教は或る一人の宗教的天才が現れ、教祖となつてその教義を宣伝し伝導して、拡がつてゆくのが定型である。だから既成宗教でも、新しい宗教的天才が現れるとき、新興宗教がおこつたり分派が行われたりする。近代の宗教は多人数の合議制や、古代の宗教であるアニミズムやシャーマニズムのように、習俗性や地域民のコンセンサスによつて現れたりはしない。教祖の考え出したドクトリンと言われる教典が中心となるのである。

又話が横道へ行つたが、世界の中、宗

教的な信仰形態で両極端を擧げるにすれば、それは回教圏と日本とであろうと私は思う。回教国家は元来が宗教国家として成立したのだから、その長い歴史や伝統を考慮してみれば、彼等の流血の争いとかに見て、近代文明になじまぬ頑迷狂信だときめつけるのも酷だが、一方彼等が日本人を指して、無宗教とか宗教音痴などと嘲笑するのを、我々は首肯することはできない。宗教とは麻薬のようなものであるとも言われるが、日本人は狂信といったような極端さは好まない民族である。そしてあらゆる思想について、バランスの取れた柔軟な同化作用を持つてゐる。その昔、一向一揆や島原の乱で血を流した日本人も、今は近代思想の民主主義やヒューマニズムを同化して、平穏な感情を成熟させた平和を望む民となつてゐている。

実は私がなぜこのような取りとめもない、雑文のようなものを書く気になつたのかというと、私が一人の日本人として、又私自身宗教人と言われる者の末席に連つてゐる一人として、外国人が日本人を指して、いわれのない無宗教民族呼ばわりするのが、全く外に堪えなかつたからである。だから宗教国家の典型とも言は山靈水神を信仰し、よろずの自然現象に神の示現を感じ、後には神を祀る神殿堂塔を建てて礼拝し続けてきた。各民族の信仰生活のありよう自身が、明白な神の存在の証明であり、神とはつまり、人の本能とも言える宗教心が生み出したものである。と波多野教授は説いている。

る。

私の遠い恩師であった、京都大学の故

波多野精一教授はその著「宗教哲学序説」の中で次のような要旨で述べている。

「宗教とは、人間が元来所与として持つてゐる宗教心、それは驚怖の感覚とか、憧憬の感情とか、良心などと同じで、人間が生命感覺として生まれながらに与えられた宗教感情にもとづくもので、そ

の宗教心が信仰する対象と遭遇った時に、宗教現象が発生するのである」と。

つまり、中世キリスト教神学であるスコラ派の宗教哲学のよう、処女懷胎とかキリストの復活など、奇跡的な話で神の存在を証明しようと躍起になつていたのでは、宗教とか神とかは何かを解明することはできない。大哲学者カントですら、三批判書の大作を著した後、その総合的結論として宗教問題を意識して、形而上学を志したが、遂に果すことはできなかつたのである。思弁哲学で宗教を解明しようとしても、それは無理であつた。

だから何千年來神の存在を信じ、或時

は山靈水神を信仰し、よろずの自然現象

に神の示現を感じ、後には神を祀る神殿

の存在の証明であり、神とはつまり、人の本能とも言える宗教心が生み出したものである。と波多野教授は説いている。

要するに私は、神仏は各個人の宗教心の中に存在し、それが山靈水神のような自然崇拜や、神殿塔の礼拝施設や、各教祖の言動を見聞することなどを契機として触発されて、各人の心中に現れてくるものであると思う。

したがつて宗教について、各宗教宗派の方や、各民族の宗教文化の程度や型態などを比較して、次元的な格差をつけようとするのは明らかに間違いであり、できないことなのである。但し近代科学の常識を逸脱した狂信や迷信は論外だが。

振り返つて我々の周囲を見廻してみると、日本中どこの地にもあまねく氏神の社や鎮守の森があり、各部落にはそれらの崇敬神社が祀られ、町村の至る所に仏教寺院が建っている。そしてそれらが現在もなお昔同様に信仰を集め、活動を続いている。この姿は欧米キリスト教国の教会や、回教国のモスクなどに比して決して劣るものでない。この事実を見ないで、どうして日本人を無宗教国民などと言えるのか。

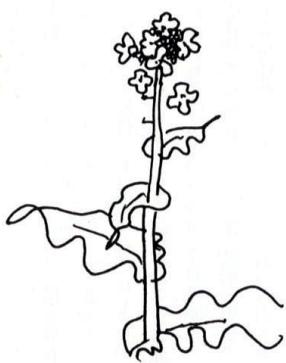
欧米人が自分達の宗教生活の型態と、

日本民族の宗教生活のありようが異つているからといって、我々を無宗教呼ばわりするのは全くの独断と偏見であり、我々としては断じて甘受することはできない。神は我々の本能的に与えられた宗教心の中に存在し、宗教現象のあり方はそ

の対象如何により、又その民族の精神文化の型態によって色々な形式を取つて形成される。我が国のように平和愛好国民であり、排他的でなく抱擁力にすぐれた民族性を持つ国民は、同時にいろんな宗教をその位置に応じて受け入れることが可能なのである。

他国の多くの宗教やそれに伴う民族のよう排他的、攻撃的、独善的な性格は日本民族には無い。或る国民の宗教の性格は、その神仏を信仰する民の民族性と共にあり、そこには何等の宗教的、次元的な格差はない。又一方宗教文化は時代文化と共にある。現代文化にそわない宗教文化は、時代遅れとも独善的とも言われても仕方がないだろう。アラブ世界の精神的後進性は明らかであると思う。

流血の宗教戦争を行つてゐるアラブ諸国の現状を見、改めて我が日本人の宗教観を顧みての雑感である。



山崎町民合唱団



詩舞道連盟

きょうのあなたをいつまでも

写真の  タルオカ

宍粟郡山崎町出水通り
07906(2)0515(代)

短歌

山崎歌話会

代表 藤村省三

大井秀子さんを讃える

百歳を越ゆれば幼にもどるらし碁客待
つ夫の鼻唄きこゆ
百年の歳月の音聞く如しつぶやきて夫
の盤に置く石
水引草の穂にいでし花彩づかずきのふ
も今日も曇り後雨

花終へし白萩の葉のかがよひて老の心
にともす灯のいろ

百歳の夫の寝息をたしかめて襖をしめ
て今を安らぐ
安らぎて今宵は寝ねむ畠かへて己が逝
くべき部屋すがすがし
身辺に仕残すことのたまりつつままで
このまま残して逝かな
百歳耳ふさがれし夫なるをゆゑよし
もなく柱とたよる
ふた言めにはお前といひてたよらるる
お前もすでに九十歳を越す
賜はれる寿命いとしみ生きゆかむ家を
守りつつ歌を詠みつつ

ミサ最中昼餉の刻を計りをアダムと
イブの裔なり我も
髪の毛が咽喉にからまる感触に恋ひ思
守りつつ歌を詠みつつ

百合をうづくまり見つ
百合をうづくまり見つ
花終へし白萩の葉のかがよひて老の心
にともす灯のいろ
新樹短歌会会員、国民文学同人友延か
ほりさん（鹿沢出身）の歌集「カリヨン
の塔」が、四月に短歌新聞社から出版さ
れた。友延さん（旧姓菅江）は山崎高女
二年生の時から作歌を始め、少女時代か
らすぐれた歌を作っていたが、このたび
出版された歌集は、歌壇の注目を浴びて
いる。

カリヨンの塔

に発表された作品の中の十首である。大
井さんが、囲碁六段大井萬兵衛百一歳翁
の夫人であることは、知る者の知ること
であるが、九十歳をこえて、殆ど家を出
ることのない狭い行動範囲の中で、休む
ことなく作歌を続けられている姿は山崎
歌話会の会員に強い感銘と刺戟を与えて
いる。

荒浪を阻むと乾く幾段かテトラポット
の鋭角そろふ
ひとひらの紙より薄き蝶飛びて山の桜
の色にまぎらふ
一つ木に吊る干がれひ潮風に乾かむと
して骨白く透く
はかなきは千人針の色褪せしひとつひ
とつの千の結び目

次に五十八年中に各地の短歌会に於て
山崎歌話会、新樹短歌会、かしわの短歌
会会員の人賞・入選した作品を掲げます。
◎西播磨県民短歌祭^{2・20}於西播磨文化会館

●兵庫県知事賞
僧に包む布施も隣と計らひて峠にわれ
らの狭く生きつぐ 森本万千子
●西播磨文化会館長賞
玻璃越しに射せる朝日が目に見えぬ焰
の影を畠に落す 小倉 松子
●文化会館運営協議会長賞
輸血さるる小さき生命保育器に生きる
あかしのあくび一つす 小島 弥生
●入選
チエンソーソーの音やむ静寂を喰りつつ桧
は雪の上に倒るる 新田 弘美
耕耘機ひと日使ひて震動の残れる指に
煙草が震ふ 北 隆治
夫の死に関りもなく急かされて共同出
荷の黒豆を選びつぐ 赤松 年重
誰を待つ椅子にあらねど並め置きて少
し奢りの夕餉を始む 名賀ときわ

幼の今日はまだ来ず 井口 隆子
左義長の炎の中に傾きて駆けゆく犬の
絵馬がおちこむ 大谷 吉次
鉢叩く夫と精靈を送りゆく耕地整理に
変りし野路を 栗山とし子

七草の芹を摘みゆく田の道にはや陽に
向きて小さき蒲公英 山本 千代
南方に征きて還らぬ夫待つと言ひるし
老の葬りふれ来る 藤原 すみ
出勤の小さき車に乗る嫁のそれより教
師の顔となりゆく
握り来し百円玉を先づ見せて菓子選る



◎ 宮城県民短歌祭(8月28日於セントラーハウス)

- 県知事賞
けものらも染まりてあらむ山脈の尾根
を焦がして長き夕映 名賀ときわ
- 県会議長賞
西陽さす高層ビルの影置きて低き家並
は早く夕づく 富和かず子
- 県会議員賞
ランニングの若者とわが擦れ違ふ一瞬
の風を爽やかに浴ぶ 田中 君枝
- 県会議員賞
一つ灯をともせる貨車が鉄橋を闇にわ
たりてゆく音ながし 野中 勝子
- 一宮町長賞
絵馬堂に牛の落書のこしたる彼の少年
もいくさに死にし 北川 智恵
- 一宮町教育委員会賞
生姜煮る匂ひ厨に籠りつつ梅雨のひと
日のけじめなく暮る 森本万千子
- 一宮農協組合長賞
子らの手に貰はれてゆく景品のひよこ
は明日死ぬかも知れぬ 安東はつ子
- 入選
信号の青に渡りてはねられし孫は信す
るものを見ふ 渡辺ちよの
- 入選
ひとり居の二日続ければ物の味甘し辛し
と言ふ夫恋ほし 澪元 善子
- 入選
久しぶりに会ひたる君もわれも寡婦に
ぎり合ふ掌のさらに皺みし太田たき子

◎ 兵庫県民短歌大会(11月23日於佐用郡スマッシュセンター)

- 入選
支払ひ日の今朝は険しき顔ならむやさ
しき色の口紅をひく 新田 弘美
- 入選
湧く水のごとに生氣よみがへり百歳
の夫碁盤に向ふ 大井 秀子
- 入選
無精卵産みつぐ難のひしめる難舍に
暑き夜がまた来る 富和かず子
- 入選
手を引かひかれてゐるか畔徃を夫と
孫とがもつれつゆく 大崎喜美恵
- 入選
寝つきたる夜勤の夫に音忍ばせ我は勤
めの身支度をする 新井 康子
- 山崎歌話会(第一回曜)
結社にとらわれない歌人の研修と親睦
の場である。
- 事務局 本町一一九 松本富治方
指導 藤村省三
- 新樹短歌会(第三回曜)
事務局 須賀沢六八 山本千代方
指導 稲村幸子
老人大学かしわの学園内
- 事務局 西鹿沢 かしわの学園内

美術とは

山崎美術協会
会長 小川 登

私に美術を論ずる資格など全く無いこ
とを承知の上で、美術とは果して何であ
ろうかと考えてみました。

「広辞林」の美術と言ふ項を開いて見ま
すと、美術とは美を表現する技術、主と
して視覚に訴えて美を表現する芸術、絵
画、彫刻、建築などを言うと書かれてい
ます。そして「美術界」とは美術家の社
会であるとも書かれています。従つて山
崎美術協会は小さい乍らも美術家の集団
であるから、やはり美術界と言わねばな
りますまい。

それでは美術界の責任とはと言うこと
になるが、それは自らの技術を鍛成して
立派な作品をつくり出すことが第一であ
ろうと思いますけれども、それと同時に
より多くの人々に美に対する認識を与え、
更には一人でも多く美術をなす人、美術
家を養成することにあると思います。山
崎美術協会は、美術協会展、町美術展、
宍粟美術展の開催を主たる事業として、
今までに十数回の会を重ね、歳月を経
て参った訳であります。此の度新たに
できた会則では、地域の美術家の卵を養
成し、美術界の底辺を広げることを事業
目的の中に一項目加えました。

最近の美術展は従来に比べて、各部門
共、二倍以上の出品点数があり、更にそ
の水準が極めて高いものになったと、美
術展の審査に当られた諸先生方、或は美
術評論家の皆さまよりお賞めを頂いてお
ります。大変喜ばしい事と存じます。

美術に限らず高い文化と言うものは、
人々の心にうるおいを与え、なごやかな
平和な人類社会、或は地域社会をつくる
のに役立つと申されています。美術展、
或は美術の持つ意義、美術家の最終的な
責任と言うのは、この辺にあるのでは無
いかと思ひます。

管理社会と言われる今日の物質的な高
度な文明を、眞に人間らしい本当の文化
社会にする為に、美術・芸術文化の果す
役割は大きいと存じます。小粒乍らも、
年々質量共に大きく育ちつつある山崎美
術協会に絶大なご声援を賜りますようお
願いを申し上げつつ、ペンを置きます。

山崎町民合唱団プロフィール

山崎町民合唱団代表 藤井七代



町民合唱団は女性十名ばかりのささやかなグループです。過去二十余名の団員も転勤その他で減つてしましました。歌う事が好きという事で毎週火曜「テレマン」に集まります。主婦業以外にあれこれと忙がしい人ばかりで時間を気にしての練習です。全員が揃う事は余り期待できません。でも目標が定まるとなれば熱が入り、活気に満ち溢れ、和氣あいあいとした雰囲気に包れます。合唱の醍醐味を十分に味わえるのはこの頃です。指導者として尾崎多佳子さん。この方は熱心に本格的な发声指導も受け、私は高度な高田三郎の女声組曲にアタッカし拙いながら歌う事ができました。吉野弘作詞「心の四季」、高野喜久雄作詞「水のいのち」日本の自然の営みを繊細に美しく綴られた曲なのですが、この時には、日常使いなれた日本語表現の難かしさに全員疲れてしまつた事もありました。こういったオーソドックスでアカデミックな曲を歌う機会は、もう無いかもしれません。

このころ、県芸術祭「赤とんぼ賞受祭」に第一回竜野大会より高砂・西宮と連続出場し、県下各地の団体と交流、素晴らしい合唱を見聞できたのは大切な想い出となっています。現在、人員不足で出場不可能なのは残念でなりません。

本年度より指導も織田佳奈さんに変わ

り、少人数に適した明るい、美しい曲が選ばれています。

五十八年度の活動としては、

● 五十八年九月二十三日
於 竜野市民会館

西播磨合唱祭

曲目「空がこんなに青いとは」

「気球に乗つてどこまでも」

指揮 尾崎正明 伴奏 織田佳奈

出場者 田村明子 藤井七代 小畠美子 片山吉恵 奥野昌子 菅原郁代

塚田妙子 内山文代 木下豊子 山中正子 片山澄之 升内央 尾崎正明 田中健一 高田三千翁 萩原徳満

男声Y.O.Bと合唱、混声合唱として出場しました。Y.O.Bは少数精銳で、ワンステージ男声曲を披露し、聴衆より拍手を受けました。

● 五十八年十一月十三日

山崎町秋の音楽祭

曲目「ねむの木の子守りうた」

「さわると秋が淋しがる」

新調の白いドレスを着用、美智子妃殿

下の優美な詩と相俟つて、優しく歌えたのではないかと自讀しています。

● 五十九年二月十九日

山崎児童合唱団定期発表会

賛助出演の予定となつております。

一人夜のじしまに聞ゆ初蛙 尾崎すず子
 葉がくれにはじらふ如き薄かな尾崎すず子
 繚乱とひなげし揺るる空まぶし高野しづ
 さんま喰ぶ詩の一章を口づさみ高野しづ
 薔薇の芽の耳搔程の朱をためて小紫いく
 名草の芽塔の礎石を遠巻に 小紫いく
 龍胆は夜も眠るらし花とさし 小畠柏人
 幹事まだロビーに一人冴え返る小畠柏人
 初鶴を遠くに聞きてジョギングす高野薰風
 藤棚に豆三百や秋の風 高野薰風
 雪の夜は何か佗しく娘に電話 田中春園
 日記買う残る余生を綴るべく 田中春園
 篓火を川面に煽ち船の渡御 田中 恵
 古里を恋ふ母に咲き白木槿 田中 恵
 花菜消え青野河原と変りけり 谷林はつゑ
 床に臥すままの患者に日は永く谷林はつゑ
 冷奴妻と二人に足る夕餉 戸田五山
 戸締りをまた確めて夜の長き 戸田五山
 田溝堰くあたり閑濃く姫螢 取越芙蓉
 青羊齒に隠れ沼あり糸蜻蛉 取越芙蓉
 身ほとりの手沢の鉢春惜しむ 鳥羽夕摩
 解く帯の渦に坐るや夕薄暑 鳥羽夕摩
 師の句碑に花映ゆる日も遠からじ中野治水
 雪積みし丸太川瀬を流れ来る 中野治水
 離芥子のそよぎ菅も頷づきて 本條 栄
 祭客送り出づれば遠囃子 本條 栄
 姥捨の姥なる吾も春は来て 崇平素栄
 吾が余生残り少し春惜しむ 宗平素栄
 紅蜀葵我家花壇の王座たり 森谷愛子
 喜雨到る種々の種買ひ急がねば森谷愛子



原爆ドームそびらに野点花祭
広島にて

山野源子

山野源子

安井方円

安井方円

山本きくえ

山本き

山崎八幡神社 奉納薪能

薪能奉賛会 副会長 山中陽一

第三回を迎えた八幡神社奉納薪能は年

年盛会となり、随分遠方からのお客様も加えて、境内を埋めつくす勢いであった。

月下旬の三井寺の鐘の音が琵琶湖に響き渡る中に母子の再会を果す三井寺、帝の宣旨を受け、神を頼み、稻荷明神の相槌により名剣を打ち上げる小鍛治、それに現

代の世相にも通じる聟・舅・嫁の争い、水掛聟に、上田照也師の仕舞高砂と秋の夜が短く感じる楽しきであつた。

能はもと野外の演劇として始められた。猿楽の時代、小屋掛けで行われていた能が能楽殿で演じられるようになつても、観客席は野外であり、能舞台と客席が対面して屋内になつたのは僅か百年にすぎない。薪能とは薪を焚いて明かりを採るために、本来は修二会に薪を献納する行事に付随した法楽の能であると言われる。薪の組み方は地面に円形に薪を立て並べるのが古法だそうである。

古い時代において、炎と人間の結びつきは現在の火、或いは照明と人間の関係とは異つた意味を持っていた。火は温かさ、明るさであると共に、人間を守るもの、人間を清めるものであり、時には死靈を呼ぶものとされていた。その火を供え、

炎で照らし出された中で行われる演能は、より神性を保ち、又幽幻昧を備えたものであつたろう。

現在の薪能は一つのブームを迎えたと言われる。若い人達はその内容がいま一つ判らなくとも、薪能の持つ雰囲気に惹かれ、魅されてゆくという。

全国の色々な場所で百を数える演能が行われている現在であるが、周囲を森に囲まれた神域の奥深い森厳に守られて、周囲の雜音から隔絶されている山崎八幡神社のような場所は、滅多にありませんよと、演者の方にも絶讚を得ている。音響効果抜群で、鏡板の松が青を捨てて、明かりに照らされると、白々と浮かび上るのも歴史を示していて面白い。

我々はこの先祖から伝えられた貴重な文化財を生かし、八幡神社奉納薪能をこの土地に定着させ、せめては隔年に開催して山崎の文化性を高め、その土壤を豊かにしたいものと念願している。

終りに臨み、茶道協会の皆様の御協賛を厚く御礼申し上げます。

大和の桜井市にある有名な大神神社は



山崎郷土研究会 前田連

大きな鳥居や立派な拝殿はあるが、神殿はなく、拝殿の向うにある三輪山が御神体であることは、数年前に郷土研究会の旅行で当社へ参った折に、神官から直接承つたのであつた。

全国各地には、岩倉神社、磐座神社の名のお宮が多くあるが、それらは磐座をそのまま神社としたものであるが、岩上神社というのもたくさんある。お宮の名前ばかりでなく、地名となつてゐる処も

もう十年も昔のことであろうか。中国縦貫開通の路線に当り、安富町三森の春荒神社の御神体が大きな岩であることで話題になつた。

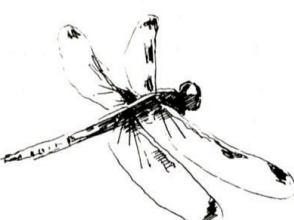
岩が御神体とは少々不思議なようでも

あるが、今日のような寺院や神社のなかつた古代の頃の人たちは、天孫降臨の神話があるように、神が天上から地上へと降臨し給うものと考えられていた。そして人間に幸福を授けたり、神意に逆えば神の怒りは人間に不幸を与えられた。その

のであった。

上ノの岩上神社の磐座は、今日でも大きな岩に注連縄が張りめぐらしてあるが、村人の伝説によると「昔、あの岩の上に須佐之男命が座つていられた」とのことであるが、須佐之男命が有名なので、多くの神様を代表しられたものと解すべきであろう。

大阪市の向陽書房発行、藤本浩一氏著の「磐座紀行」二七〇〇円に、岩上神社や岩石神社も記載されている。



関西棋院穴粟支部創立十周年『穴粟の碁』出版記念大会

囲碁同好会
会長 高野主介

四百年の歴史

穴粟の碁は四百年の歴史に彩られており、各町村にそれなりの足跡をみ、またその歴史を立証することができます。特に明治後年から大正にかけては、これほど優雅な碁もあつたかと思えるほどです。昭和の前年と戦後の黄金時代はそれぞれに楽しいのですが、質が違います。

ここ数年、敬慕してやまないいく人の先輩が相いついで他界されました。活字にとどめて、碁界に尽くされた功績を長く伝えるのは、私どもの責任であると思ひます。

若手が台頭し、草深いと思われてきた山崎の里から日本の桧舞台に雄飛しています。彼らの躍動譜を見ることは、私どもにとつても誇らしい喜びであり、あとに続く者にはさらに大きな目標になるでしょう。

碁の記録ともなると数少なく、ついこの間と思えることでもはつきりしない。

碁はいかに曖昧なものかと痛感させられます。

この機会に、前野四郎さんから同家に

伝わる膨大な資料の提供を受けました。穴粟の碁碁史をまとめなければ申しわけない、という気持ちで駆られました。関西棋院穴粟支部創立十周年の記念事業として、穴粟の碁碁史と郡内同好の士のプロ高段者による指導碁とを合わせて、「穴粟の碁」が企画されることになったのは、望外の仕合せです。

記念大会

関西棋院穴粟支部の創立十周年を祝う記念大会が、昨秋10月8、9の両日、山崎町農協会館で開催されました。初日は記念誌『穴粟の碁』出版記念パーティ、二日目が記念式典で、連碁、プロアマ公開対局、指導碁、チビッコ碁会、かくし芸、記念碁会等々もりだくさんのプログラムが組まれ、多彩かつ密度の濃い祝賀行事が盛大にくりひろげられました。

式典には小川登県議、谷口巣町長、前野四郎山崎碁同好会会长はじめ地元関係各位、堀中辰夫関棋兵庫地本本部長、

渡辺博一玄遊会会长、西村修星遊会会长ら来賓多数、本部からは橋本宇太郎総顧問、宮本直毅九段、東野政治八段、木下敬三

五段、芦田磯子五段が参席されました。また、松下電器永山隆海外部長は多忙の中、アメリカから飛行機を乗り継いで、医師の竹内聰さんは、「面識はないが『穴粟の碁』に感激した」と和歌山から、それぞれ祝賀にかけつけて下さいました。

橋本宇太郎総帥ご祝辞

(要旨)

わが兵庫県は古より多くの傑出した碁人、久保松先生、木谷、前田等々を生んできました。とりわけ穴粟郡の碁には四百年の伝統があり、近隣の町とともに碁王國兵庫のゆたかな土壤を形成しています。

このたびは記念誌『穴粟の碁』が出版され、少年時代お世話になった懐かしい方々のお名前も拝見しました。ひとえに穴粟の先輩の血脉を受け継ぎ、底抜けに明るい碁碁讃歌を、昭和の盛大に高らかに歌いあげたこの本が吼々の声をあげたのです。燃える情熱が昇華し、結晶したとも思えるのです。穴粟支部の『穴粟の碁』は数多くの“シ”に彩られています。

四百年に亘る歴史の史、多くの先達、先生の師、そして数百人の人、莫大な資金と労力を援助していただきたいご支援の支えでようやくこの本が陽の目をみました。かといって支部活動が中止の止つてはなりません。今から新しい十年に向かって開始の始でなければ……」



多くの“シ”に彩られ

本は一度生まれるや自らの運命を辿る。はるか後世の文化史的評価を希いつゝ。穴粟の先輩の血脉を受け継ぎ、底抜けに明るい碁碁讃歌を、昭和の盛大に高らかに歌いあげたこの本が吼々の声をあげたのです。燃える情熱が昇華し、結晶したとも思えるのです。穴粟支部の『穴粟の碁』は数多くの“シ”に彩られています。

四百年に亘る歴史の史、多くの先達、先生の師、そして数百人の人、莫大な資金と労力を援助していただきたいご支援の支えでようやくこの本が陽の目をみました。かといって支部活動が中止の止つてはなりません。今から新しい十年に向かって開始の始でなければ……」

一管に託す

上田流
八首竹士会

石野和雄

一管に託す

上田流尺八道竹杜会
石野和雄

人間生きて生活をする上で、音楽がもし無かつたらどうであろうと考えたとき、その味気無さに毎日の生活がなり立たぬであろうと想像致します。世界中の国などの土地でも、古代よりあらゆるその地方独特の音楽があり、独特的な楽器をもつております。音楽が生活の中につかり溶け込み潤滑油的役割りをもち、意識するとせざるとによらず、日常その恩恵がある



川戸獅子舞保存会長
中村正澄

岩田神社の獅子舞は、奉納神樂・剣の舞・八島の舞・さんぎりの舞・ほらがえしの舞・油買いの舞・道引の舞・まるさんの舞・子剣の舞の九種類からなっています。

今より三百五十有余年前のころより始まり、氏神様の祭礼当日、全氏子の無病息災を祈願し、五穀豐穰を祝つて、神前にささげる獅子舞であります。奉納神樂を舞うことによつて、祭礼の一切の行事が始められます。

旧山川藩主の信仰も厚く、岩田村獅子舞として絶えることなく、今日まで続いている由緒ある獅子舞であります。

浴しています。私が尺八の音に魅せられた終戦直後の青年時代この道に入り、何とか今日まで途中休み乍らも続けて参りましたが、今にして思えば、よくまあこの単純な一尺八寸の竹で、孔と言えば五つだけ、こんな楽器を吹き続けて、行き着くところを知らぬ音の無限の深みに、又芸の奥の深さに、今さら驚いております。

この楽器の特殊性により、尺八奏者と云うのは極く少数ですが、当山崎町では幸い、故松本先生の時代より、組織的に尺八を広められたお蔭で、割合多數の愛好者があることは、この上も無く喜ばしいことあります。邦楽の中でもこの簡単な楽器の音が、なぜか日本人の心を捉

える響きをもつています。洋楽と比較して思うことは、洋楽洋楽器は、建物で言えば近代建築工学の粹を集めた、寸分の狂いもない高層ビルのようなもの、尺八はカヤ葺きの家のような清楚なもの、又川にたとえれば、洋楽はコンクリートで完全に型を整えた人工の運河であり、尺八は山の奥で岩洩る清水のせせらぐ渓流の如し、大小の岩石は型を整えず、全く自然のなすがままの姿であり、苔蒸す両岸は曲水にえぐられ、人工的な手は何も加えられなくても、それはどんな名工によるもの出来ない偉大な美しさをもつてあります。静かに座して一管に心をこめて吹くその音は、その時々によって響きが

みな異り、同じ音色は出ぬものです。温度湿度周囲の状況によつても、又体の具合、感情によつても左右されます。単純なもの程、ばかり知れぬ奥の深さのあるものです。人間、趣味を持つことが、如何ばかり人生を樂しいものにし、潤いをもたせてくれるごとが知れません。今にして思えば、この一芸だけでも、よくこの道に入つたものだと、この頃になつて一入考えるようになりました。

当山崎町の文化の發展に、一人でも多く若い方々が参加され、良き後継者になられるよう、そして古きよきものを後世に伝承されますことを、心より願うものであります。

レーボールにも活躍するスポーツマンであります。

このように会員が、和やかに過せるのは、獅子舞に宿る、神への感謝の念、労働の喜び、家内円満・部落円満の願いが、自然と身についてきたからでしょう。

獅子舞保存会が発足して十四年、現在は若い人たちへのバトンタッチの最中、若い人们は伝統を守ろうと、本気で取

最後に、我々の栄誉を記して：

五十六年 ポートピアに出演
五十六年 クスノ木賞受賞

五十七年

私とむつかのふれあい

播磨さつき会
理事 中井 昭男

私とさつきとの出会いは五十年ほど前のことです。それは母が、「大きくなつたら何処で働いていても、さつきが咲きだしたら家に帰つて来いよ」と言ったことから始まる。それは、農家では麦刈り田植と猫の手も借りたい程忙しい季節だからである。

その後、職場の先輩（元江藤大臣）は
焚められ苗をもつて作り始め二十数年
の間中休みもあつたが、多くの方々の
指導をうけ、今ではなんとか水かけが分
かった様な気がします。盆栽作りは根気
が大切です。大自然の風雪にたえ、何百
年もの年月を経た大木が大地にガツシリ
と捉んだ根張り、雄々しい立ち上がり、
幹ぶり、そして枝くばり想像しながら
盆栽に仕上がる夢を見ながら育てるのは
難しいのですが、楽しいものです。

五月はいよいよボクが脇み娘&
昨年まで出なかつた花芸、また欲しい花
芸が出たときのうれしさ、又一本の木を
見てここに枝がほしいと思う所に胴吹き
した新芽を見つけたその瞬間のうれしさ、
秋も深まりその紅葉の美しさと太さを増

西行や芭蕉の文学に

我が老を習う……

山崎文化連盟
副会長伊藤親保

母でいてはしてある。死を習うことは生を愛することであり、死を願う静かな孤獨は、老になつて始めて知る神聖でやらかなものであり、甘えの生に慣れられた私たちは、目前の今の昭和元緑の太平に、乱を知ることが大切であり、そこに

人生の生き方であり、世俗への態度である。そこには不安と焦慮の人生の孤独感があるが、彼の傍観的な流離の知性も見られ、無常に心がける生へのひそかな愛撫が、彼の風流への真髓である。

したサツキを眺めて二度三度とうなづき満足させてくれる喜びがある。他にもさつきの良さはまだまだあると思いますが、私はさつきが正直にこうした喜びを与えてくれる限り、飽きずに一生ともに過せそうです。

当然のプライバシーであるはずの「茶飲み友達の会」の結成のもと、地上の楽園のような幸福論の老人福祉対策の実施に驚いている。

西行は平安末期の保元平治の戦乱期に、草庵生活と旅の孤独と窮乏の中に、風月、花の美への歓喜と、仏への共感に安住を見出し、それがわくば 花のもとにて 春死なん
その如月の 望月のころ
の辞世の歌を残し、七十三才で入寂して

で等々、生涯教育として教えられ、更に当然のプライバシーであるはずの「茶飲み友達の会」の結成のもと、地上の樂園のような幸福論の老人福祉対策の実施に驚いている。

「おしん」ではないが、明治生まれの私たち老人は、忠孝と立身出世の修身を中心とした教育に育ち、人としての道理や自然の摂理も、躰や実践道徳として教えられた。特に青年期の教育は、人生の方向づけであり、中学校での中世隠遁文學の無常観や閑雅の思想は、私的人生觀や芸術觀として心に強く残っている。

教育は即修身であり、更に戦争体験をしていている私たちには、喰つて寝て!! お金が貰えて!! 国や町に生かされているような、老の生や!! 極楽トンボのようないふる。この時代の社會的思想的動乱期に、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず……」と、人としてみかの無常をテーマに、京の安元の大火・元暦の大地震・養和の饑饉を叙し、隱遁曆の感概の自叙的な隨筆である。

鴨長明は中世初頭の社會的思想的動乱期に、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず……」と、人としてみかの無常をテーマに、京の安元の大火・元暦の大地震・養和の饑饉を叙し、隱遁曆の感概の自叙的な隨筆である。

その根底を流れている無常感と厭世觀は流麗の文章となり、「平家物語」と共に中世文學の達成といわれ、六十一才で亡くなっている。諸行無常であればこそ、私達の心に天地生々の運行も見ることが出来るのである。

謡曲

十五徳について

謡曲同好会

横尾

昇

謡曲はむつかしくて、なかなか親しめないとされている様ですが、昔から謡曲十五徳と言つて、次の様な言葉があります。

が深く、味わい深いものです。

昔と違つて、今では謡曲も大分大衆化してきて、山崎町を始め郡内でも同好の人が多くなった事は喜ばしいことと思います。

一般の方々も、もつともっと謡曲に親しんでいただいて、益々この道が栄えます様祈つております。



誠に名言だと思います。
この様にこの道に入ればいくらでも奥

居乍らにして天下の名勝に遊ぶ
師無くして文字を習う
交友無くして人情の機微に徹す
努力せずして品位を養う
教えずして歴史を知る
学ばずして歌道を窮める
葉に頼らず気持を朗化す
神詣でせずして神徳を知る
坐して花鳥風月を楽しむ
酒飲まずとも知友を得る
修めずして佛道に徹する
労せずして体力を養う
人居ながら閑居を慰む
古き書を繙かずして故事を知る
修業せずして武士道を知る

茶道研究会

定例会記

茶道研究会副会長
神山宗明

山崎町で年に二大祭典、六月のさつき展、十一月の菊花展並びに美術展の数々、日常精魂こめられた作品のご成功に感じ入り、頭の下る思いです。その時に際しまして、茶華道協会のお茶席は、各先生の社中がかわるがわる、若い方たちの美しいお手前や、銘品のお道具の数々をたのしく勉強させて頂いております。

さてこの茶道が四百年もの長い間生きつづけてきた根底には、日本人の心をつたえる何かがあつたにちがいありません。茶道を学ぶ現代の私たちは、茶道の心が人々に受け入れられ、伝えられたことを真剣に考え、又若者男女一般の方々が茶道に親しまれることを考えます時、どうしても茶道のみの会合が必要となり、ここに茶道研究会が発足しました。

以来庄静夫会長のご尽力によりまして本年第十三回の総会を開かせて頂きました。庄会長の哲学から解かるる茶道、禅

山崎銘菓

さつき

さつき本舗



洋菓子司

山崎

から論される茶道、人々の幸せとよき人をつくる為、長年の尽力をつづけていて下さいます。そのご恩にむいねばならぬと会員一同感銘致しております。

去る十月の定例会には、宇原の志水宗嘉先生御夫婦のご尽力によりまして、宇原法性寺に於て児童茶会を開かせて頂きました。会長御講話の後、五才から中学生までの十五名の児童担当にて、先ず本尊様にお茶をお供えし、本堂の前にて三ヶ所のお点前席、御院主様、会長様を五才の子の点前席にご案内致しました。お茶椀ののったあやぶまれるお盆を上手に持つて、教えられた通りすらすらと運び出し、やっと手のとどいた銀瓶の湯を入れ、小さい手で茶筅のよくふれましたこと。初めから順序正しくやつと一服の茶が出来上り、客に出されまして、ホッと私の顔をみられました。私の目と目が合いました時の安心感、童心、無我の境地、私は、ああこれだ、茶の心…。私たちの学ばねばならぬ点前、茶の精神を感じました。現代の世相に対応して、男女チビッ子より茶の心、点前をはじめることは、非常に大事なことと痛感致しました。

私の常に敬称しております、武野紹鷗
「わびとは 正直につつしみ深く
おごらぬさま」

何時も自分の心をみつめております。

▼山崎町文化連盟役員及び団体名イロハ順

役職名	氏名	団体名
顧問	庄 静夫	前野 四郎
副会長	壺阪 壽	小川 登
伊藤 親保	杉元 清美	福山 清一
操二	山崎謡曲同好会	秦 耕三
尾崎 正明	山崎邦樂・邦舞・小唄研究会	谷川 道一
金井 信治	播磨さつき会	塚本重郎兵衛
安田 浩三	山崎茶華道協会	根岸 元彦
前田 連	山崎郷土芸能保存会	藤村 省三
高野 圭介	山崎歌話会	藤井 慧乘
衣笠 正	山崎文学会	福田栄三郎
三宅 宏佳	山崎合唱連盟	山崎茶道研修会
中川治門	山崎俳句協会	前田士研究会
杉元 栄男	山崎囲碁同好会	高野圭介
菅原 杠夫	山崎詩文道連盟	衣笠正
入江 庄和	新潮会	三宅宏佳
福山 清一		中川治門
長尾 良彦		昭和会
事務次長		杉元栄男
事務局長		菅原杠夫
監事		入江庄和
事務次長		福山清一
長尾良彦		長尾良彦

★編集後記元彦★

第三号を迎えて嬉しい悲鳴をあげることになった。というのは、原稿の集りすぎである。依頼した原稿だけでも、予定期数を超えてしまったのに、予期しない投稿原稿まで入ったものだから、とても納まり切らない。今回も編集会議で相談した挙句、広告を増して金を作り、増頁でまかなうことになった。しかし広告もこれが限度であり、これ以上は本誌の品位にかかることになるので、もう出来ないと思う。今回でも、依頼原稿の中でさえ、二、三編を割愛しなければならないので、今後予算の増額がない限り、こんな状態が続けば、編集会議で原稿の取捨選択は止むを得ないと、ご承知戴きたいと思う。喜ぶべき状態ではあるのだが、編集者は辛いのである。

何だか、のつけから泣き言ばかりで申し訳ないが、号を追う毎に発展充実の傾向にあることは、ご同慶の至りといつてよからうと思う。しかし欲を言えば文芸面で、新人が現れて欲しいと思う。若い人で有望な方がどしどし投稿して下されば、われわれは喜んで席を譲りたいと思つてゐるのである。期して待つことや大

共同石油株式会社特約店



株式会社 本條商店

代表取締役 本條衛

本社 宮城郡山崎町中井96 TEL 07906 ②4321(代)



飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる处方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」なるものにたどりつき、自作自演で20数年を歩いて参りました。46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んであります。

当社では、企業は社会の公器でなければならないと常に進言し、流通の世界の中で使命感に燃え、生活文化の向上を願って多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

〈飛石農機(㈱)〉〈トビイシ住設(㈱)〉〈飛石建機(㈱)〉〈飛石レンタ・リース竜野〉

最新型カラー現像機導入・サービス料35円



Specialty Camera Shop
フジアカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 2-2089

山 交 タ ク シ 一

山 崎 神 姫 バ ス 西 隣

電話 07906-2-2166(代表)

幸

せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (07906) 2-0052

たしかな技術で世界をむすぶ

NEC

兵庫日本電気株式会社

兵庫県宍粟郡山崎町須賀沢231番地 ☎ 播磨山崎 (07906) 2-1222代

登録商標

SANYO-HAI

山
陽
盃

兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限公司

高級清酒

名
聲
轟
四
海

登録商標

老松

スエヒロ
オイマツ

兵庫県山崎町 老松酒造有限公司

地元にひろがる

心のふれあい

にしじん



西兵庫信用金庫

理事長 杉元清美